

蓮生の和歌

— 新和歌集釈教部所収歌について —

千古 利恵子

〔抄録〕

宇都宮歌壇の活動を知る資料の一つとして新和歌集がある。新和歌集の入集歌人第一位は宇都宮第五代統主・蓮生である。入集歌五十九首のうち、本集釈教部に収録されている六首を調べると観無量寿経に説くところを詠じた作が認められる。本稿では、耆闍会の作「み山にも」・下品下生の作「みちもなく」

の両首を詠じるにあたり、蓮生が観無量寿経に説くところを如何に受けとめていたか、善導の著作・観無量寿佛経疏とのかかわりにもふれつつ、若干、吟味・考察してみる。

キーワード…蓮生、新和歌集、耆闍会、観無量寿経

I

宇都宮歌壇の活動を窺い知る作品の一つに新和歌集がある。新和歌集は、現存する伝本の多くに「此宇都宮打聞新式和歌集者。藤原為氏卿下^二向宇都宮^一撰^レ之。」という奥書^{〔1〕}が付されていることから、為家の嫡男・為氏の撰集との説はある。しかし、実質上は笠間時朝または宇都宮景綱によって纏められた私撰集といわれている。本集入集第一位は、宇都宮五代統主で、その弟信生（朝業）とともに一族の和歌活動

の基盤を築いた蓮生（頼綱）である。本稿では、本集に収録された蓮生の和歌を吟味・考察し、歌人・蓮生の世界の一端をさぐってみる。

II

蓮生は、治承二（一一七八）年、関東武将の名門に生まれる。北条時政の後妻牧氏の女を妻としたこともあり、幕府有数の御家人となつた。しかし、元久二（一二〇五）年、北条時政が妻牧氏と謀り、源実

朝暗殺を企てた事件に加担したとの嫌疑をうけ、北条政子に討手をむけられた。それ故か、頼綱は一族郎従六十余人とともに、元久二年八月十六日、二十八歳の若さで出家²。蓮生と号す。その数年後、蓮生は、当時摂州勝尾寺に法然上人を訪ねている。

承元二年十一月八日、上人の勝尾の草庵³にたづね参じて念佛往生の法御教訓をかうふるとき、上來雖説、定散兩門之益、望佛本願、意在衆生、一向專稱、彌陀佛名の文をふたび誦したまひて、往生せうせじは、わど、の心ぞ、一向に念佛せば往生疑ひなしとの給ける。御ことば耳にとゞまりて、おほへけるのち一向專修の行者になりにけり。上人御往生の後にはふかく善恵房をたのみ申けるが、結縁のために、四帖の疏の文字ばかりをうけ、ついに出家して實信房蓮生と號し、西山の草庵をしめ、一向專念のほか他事なかりき。

（四十八卷伝・卷二十六）⁴

また、西山上人縁起は、四十八卷伝の記述をさらに詳しく述べている。

法然上人しばらく攝州勝尾寺に閑居し給ひし、上洛承元三年の冬、宇都宮入道蓮生あざなをば實信とぞ申ける。上人の菴室に詣て、出離の要道をたづね申す事ありけり。他人にはいまだ一卷の講釋を終られたることだにもまれなりしに、此の禪門に對して觀經の疏四帖を一反談とほされけり。その散善義の終りにいたりて、上人「上來雖説定散兩門之益望佛本願、意在衆生、一向專稱彌陀佛名」の文を二反まで誦し給て、往生の得否はたゞ汝が意にありとぞしめされける。未來に益あるべき人なりと鑒^{かんが}み給けるにや、不思議の事な

るべし。

（西山上人縁起・卷第二）⁵

蓮生は出家後も幕府に仕えたようで、承久・嘉禎年間（一二一九～三八）ごろ伊予の守護職に補せられている⁶。後半生は主に京都（八条）に住み、歌人として活躍。その女を為家に嫁がせたこともあり、宇都宮歌壇と京都歌壇とのかわりを深めたのである。正元元（一二五九）年十一月十二日、八十二歳で没す⁸。

ところで本集は、正嘉二（一二五八）年十一月一日以降、正元元年七月二日までにひとまず成立し、その後、弘長元（一二六一）年夏頃までに増補・削除がなされたといわれる⁹。収録歌数は八七五首。入集上位歌人は、蓮生59首・時朝51首・景綱47首・泰綱44首・淨意37首・朝業34首等である。蓮生の詠は、春7首・夏2首・秋10首・冬5首・賀1首・神祇1首・釈教6首・離別1首・羈旅2首・哀傷6首・恋上3首・恋下1首・雑上5首・雑下9首収録されている。本集の成立年時から考えると、これらの作には、晩年の蓮生の和歌理念が投影されているといえよう。既に紹介した如く、蓮生は出家後、勝尾の草庵に法然上人を訪ね、上人に帰依している。また上人没後は、法然上人の弟子・証空に師事していることから、本集に収録された釈教教には、浄土教を信仰する作が多く認められる。そこで本稿では、蓮生と浄土教信仰について、若干検証をしてみることとする。

III

新和歌集に収録された釈教歌二十七首のうち蓮生の詠は六首挿入され、最も多い。しかも、その六首中の四首には、浄土三部経の経文か或は浄土三部経に説くところをふまえると推定される詞書が付されている。次の詞書もその一例である。

耆闍流通の心を

み山にもおなしにほひに咲にけりみやこの花の色もかはらて

經典に説くところを和歌に詠む場合、その經典の偈文を歌題として掲げることが少なくない。そこで、「み山にも」の詠の歌題「耆闍流通」を浄土三部経（無量寿経・觀無量寿経・阿弥陀経）に調べても見出せない。しかしながら、「耆闍崛山」の語は、無量寿経・觀無量寿経の経文中に見出すことができる。¹¹⁾

我聞如是。一時。佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。¹²⁾

〈無量寿経 No. 360. 265. 11 ~ 12〉¹²⁾

無量寿経には、右に掲出した如く、修行者が、当時インドの最強国であるマガダ国の首都・王舍城をとりまく峰の一つである耆闍崛山（仏の説法の会座）に集まった、と記されている他には、この経に説かれた内容と特に深くかかわってはいない。一方、次に掲出する觀無量寿経の場合は、無量寿経とは異なる。

如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆千二百五十

人俱。菩薩三萬二千。文殊師利法王子。而爲上首。

〈觀無量寿経 No. 365. 340. 1. 27 ~ 341. a. 1. 2〉¹³⁾

爾時世尊。足步虚空。還耆闍崛山。爾時阿難。廣爲大衆說如上事。無量人天龍神夜叉。聞佛所說。皆大歡禮。佛而退。¹⁴⁾

〈同・346. b. 1. 18 ~ 1. 20〉

觀無量寿経には、その経名から明らかな如く無量寿仏（阿弥陀仏）とその仏国土を理念として觀察する方法が説かれている。ところで、その観法は、右に掲出した如く、仏が王舍城の耆闍崛山に、多くの修行者とともにおられた時、国王夫人・韋提希のために王舍城の宮廷でなされた説法である。説法がなされたのは「国王・頻婆娑羅はその太子・阿闍世により幽閉されていたため、韋提希夫人は秘かに国王に食物を届けた。ところが阿闍世はそれを許さず、母の韋提希をも幽閉した。韋提希夫人は愁憂し憔悴し、耆闍崛山に向い、礼拝して「願遣目連尊者阿難。與我相見」と祈ると、仏は目連・阿難とともに王宮に現れた。そして韋提希夫人に観法を説いたのである。その説法が終わると前掲の如く、仏は耆闍崛山に還られたが、阿難は広く大衆のためにその観法を復説したと、觀無量寿経は説き終えている。そこで、觀無量寿経に説くところと、蓮生の詠「み山にも」の詞書「耆闍流通の心を」に記されている「耆闍流通」とのかかわりを検証してみる。

ところで、「み山にも」の詠は、その歌題をふまえず解釈すると、春になり都に咲いている桜の花の、その花の色も変わることなく、奥深い山の此所にも同じように色美しく咲いていることだ、という意になろう。本集の釈教部に収録されていないならば春の叙景歌として解されよう。觀無量寿経に説くところを、蓮生はどのように受けとめていたのか―蓮生の觀無量寿経の理解の深さと「み山にも」の作に詠み込

まれた想いには、密接なかかわりが認められよう。蓮生をはじめ知識人達は、經典に説くところを学ぶ機会には恵まれていたにちがいない。

前述の如く、蓮生は出家後、法然上人に教えを請うために、勝尾寺に

法然上人を訪ね、四帖疏（観無量寿佛経疏）を受調している。法然上

人はその著・選択本願念仏集において「静かに以みれば、善導の観経

疏は、これ西方の指南、行者の目足なり。（中略）善導はこれ弥陀の

化身なり」と、偏えに善導に帰依していることを記している。こ

の一文をふまえると、法然上人が蓮生に講じた観無量寿経四帖疏は善

導著作の注釈書と考えられる。即ち、蓮生は善導の観無量寿佛経疏に

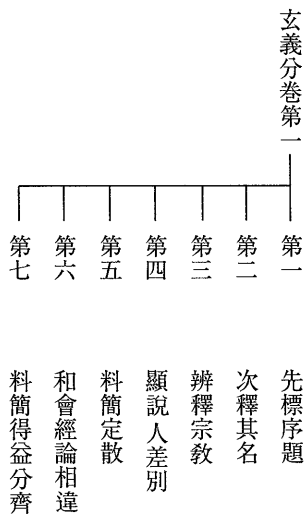
説くところに拠って、「み山にも」を詠じたのかもしれない。

さて、善導の著した観無量寿佛経疏は観経玄義分巻第一・観経序分

義卷第二・観経正宗分定善義卷第三・観経正宗分散善義卷第四からな

る。観経玄義分巻第一は、観無量寿佛経疏の総論で、この総論は次に

示す如く、七部門に分けられる。



観経序分義卷第二は、次に示す如く、その説かれた内容から証信序と発起序とに分かれ、その発起序はさらに七部門に分かれる。¹⁵

序分義卷第二

証信序

化前序・禁父縁・禁母縁・厭苦縁・欣浄縁・散善顯行縁・定善示觀縁

観経正宗分定善義卷第三は、観無量寿経の本論にあたる正宗分を説く。

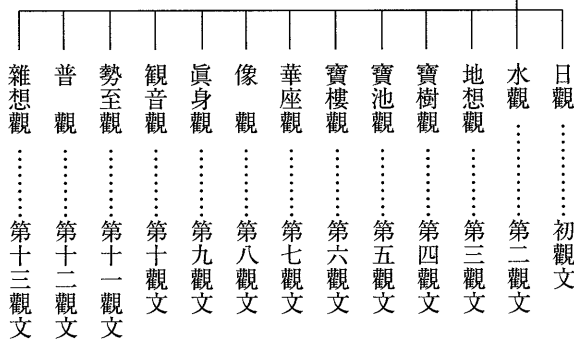
正宗分は定善と散善に分別されるが、その定善二分の分別は慧遠・善

導両師では異なる。慧遠は十六觀を定善、三福を散善とし、善導は十

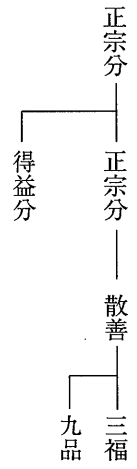
三觀を定善、後の三觀及び三福を散善とする。¹⁶

正宗分定善義

卷第三——十三觀



観經正宗分散善義卷第四は、次の如く分けられる。



以上の区別に拠ると、観經序分義卷第二・観經正宗分定善義卷第三・観經正宗分散善義卷第四のうち流通分（王宮流通）までの説法を王宮会とし、流通分（耆闍流通）の説法を耆闍会とすることになる。ところで、耆闍流通分の分別は、散善義に次の如くある。

就_レ耆闍會_ノ中_ニ 亦有_リ 其_ノ三_一 一_ニ從_レ爾時世尊_一 已_レ下_ハ明_ス
 耆闍ノ序分_ヲ 二_ニ從_レ 爾時阿難_一 已_レ下_ハ明_ス 耆闍正宗分_ヲ 三_ニ
 從_レ無量諸天_一 已_レ下_ハ明_ス 耆闍ノ流通分_ヲ 上來雖_レ 有_ト 三義_ノ
 不同_一 總_{シテ}明_シ 耆闍分_ヲ 竟_ス

〔観經散善義卷第四 p.71下18〜111〕

さらに善導大師は「五_ニ從_レ 爾時世尊_一 下_ニ至_ル 作禮而退_ニ 已來_一 總_{シテ}明_シ 耆闍分_ヲ」と、観無量寿經に説くところを、天人たちの歎びが耆闍流通分であると注している。香月乘光氏は、その論稿において、観無量寿佛經疏を「この書は善導の信念と体験とによって浄土の教義を述べたものであるが、これはまた畢竟衆生教化のためのものであったことを忘れてはならない。」と述べていられる。この説をも併せ考えると、蓮生は、「みやこの花の色」（王宮会の説法）が、「み

山にも」（耆闍会）でも「おなじにほひに咲にけり」（変わることなく説かれたことだよ）と詠じるにあたり、善導の観無量寿佛經疏に説かれて「耆闍流通」の經文をこの和歌の詞書として付したのであらう。

蓮生は、善導の観無量寿佛經疏をも丹念に読むことよって、観無量寿經の教えを深く受けとめ、「み山にも」の一首を詠じたのである。一見平板な春の叙景歌とも鑑賞し得るこの一首が釈教歌として、また「耆闍流通の心を」の詞書を付して詠じることよって、その詠歌内容に観無量寿經に説くところを包含する作となり得たことを、茲に確認せねばならない。

ところで、清少納言が枕草子に「九品蓮臺の間には下品といふとも」（百一段）と中宮定子に対する想いを述べ、公任が和歌九品を纏めて如く、平安時代の知識人達は既に、観無量寿經に説くところは心に留めていただろう。しかしながら、蓮生の如く、善導の著作・観無量寿佛經疏にまで精通していたか、という点甚だ疑わしい。それ故か、観無量寿經の成立過程にかかわるともいえる王宮会・耆闍会を詠じた和歌は尠い。勅撰集に収録されている王宮会・耆闍会の詠は、次の二首にすぎない。

耆闍会 後嵯峨院御製
 いひおきしわかことのはかはらぬに人のまことはあらはれにけり
 〔新後撰集・釈教・六六七〕
 観無量寿經、王宮会のところを 円胤上人

春やときみやまざくらにさきだちて都の花はまづぞひらけし

〔統千載集・釈教・九七八〕

右の二首は、いずれも類題法文和歌集注解に、各々、次の如き注を付して収録されている。

新後撰

・一七〇二いひ出し（二句以下略）

後嵯峨院

是も科の調也。経にはなし。此経に爾時世尊歩^二虚空^一還^三耆闍崛山^一とあり。是は韋提希の請によりて世尊の阿難と同じく王宮に到りて弥陀の浄土の相をとき玉ふ。これを王宮会とは云也。その説終りて耆闍崛山に帰り玉ふ後、阿難のひろく大衆の為に上の世尊のとき玉へるにははらぬによりて世尊の誠も大衆の中にあらはれたりとよみ玉へり。安樂集の説にも王宮会を単説とし、此会を再説とせるは此義也。単は一度也。再は再度也。阿難の世尊の説をふた、ひのへたるをいへるなり。

・一七〇一春やとき（二句以下略）

此王宮会といへるは経語にはなし。科の詞也。其義はむかし世尊の韋提希の請によりて神通をもてかくれて王宮に入玉ひて此十三観法をとき玉へるをさす也。道綽禪師の安樂集に観経は王宮耆闍阿会の説とあり。此王宮はもとより科の詞にたかひなき也。（略）此歌の心は耆闍崛山の仏場にては、いまだ観経の説のひらけざる以前に王宮にしてこれをとき玉ふによりてみ山桜にさき立て王都の法性の花はとくひらけしとはよめり。（略）其後世尊の韋提希の請によりてかの宮に入玉て此経はとき玉ふによりてかく頻婆娑羅王の宮と韋提

希との事をあはせて王宮会とはいふなり。

「いひおきし」「春やとき」両首の注釈文には「王宮会」「耆闍会」

の二語はいずれも経文にはみえないとある。また、「王宮会」とは「韋提希の請によりて世尊の阿難と同じく王宮に到りて弥陀の浄土の相をとき玉ふ」ことをいう、と注釈しているものの、「耆闍会」についての明確な注は付していない。「王宮会」「耆闍会」を歌題として和歌を詠むことが如何に難問であったか、この注釈本文からも窺い知ることができよう。次に掲げる詠は、以上の点からも注目される。

観経十六観の心をよみ侍る中に

耆闍流通　これは王宮の経を耆闍山にかへりておなじくとく心也

みやこにてみしにかはらずありあけの月はすみけりをばすての山

〔前長門守時朝入京田舎打聞集・釈教・二八六〕

この詠は、都で見た姿に変わることもなく、有明の月は澄み輝いていることだ、ここ姥捨山でも、という意である。時朝は、詞書に「これは王宮の経を云々」と記すことによつて、「みやこにてみし月」とは都の王舎城で釈尊が説かれた教えの意、「をばすて山」で「かはらずすみけり」とは耆闍崛山でもその真理は変わることはないという意、であることを示したのであろう。時朝が観無量寿経の教えを、蓮生の如く、善導の観無量寿佛経疏を精読することによつて、深く受けとめていたか、ということとは、稿を改めて検証したい。

時朝は元久元（一一〇四）年誕生、文永二（一二六五）年二月九日、六十二歳で没す。父・朝業（信生）は新勅撰和歌集以下に十三首撰入された歌人である。朝業の兄が蓮生にあたる。時朝は、父・朝業、伯

父・蓮生、さらに従姉妹が為家室であったことから、歌人として育まれるための文化的環境は整っていたと考えてよい。また、仁治三（一二四二）年の後嵯峨天皇の大嘗会には寄検非違使を務めている。翌年の寛元元（一二四三）年には長門守に任ぜられている。新和歌集に収録されている五十一首のうち四首が釈教歌で、釈教部収録歌数は伯父・蓮生に次ぐ。

本集に収録されている蓮生の釈教歌のうち、次の和歌も、善導の観無量寿佛経疏に説くところをふまえて検証する必要がある。

下品下生の心を

みちもなくわすれはてたる故郷を月はたつねて猶そすみける

この詠の詞書「下品下生」は、観無量寿経に次の如く説かれている。下品下生者。或有衆生作不善業五逆十惡。具諸不善。如此愚人。以惡業故。應墮惡道。經歷多劫。受苦無窮。如此愚人。臨命終時。遇善知識種種安慰。爲說妙法。教令念佛。役人苦逼。不違念佛。善友告言。汝若不念彼佛者。應稱歸命無量壽佛。如是至心令聲不絕。具足十念。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。於念念中。除八十億劫生死之罪。命終之時。見金蓮花猶如日輪。住其人前。如一念頃。即得往生極樂世界。於蓮花中。滿十二大劫。蓮花方開。當花敷時。觀世音大勢至。大悲音聲。卽爲其人廣說實相除滅罪法。聞已歡喜。應時卽發菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生想。名第十六觀。

〈観無量寿経 p.346 a.1.12 ~ 1.26〉

類題法文和歌集注解では、経文を掲出し、「みちもなく」の詠に次

の如く注を付している。

下品下生の經に作「不善業逆十惡」具「諸不善」如是愚人とあり。かやうの悪人無道にして仏を忘れはてたるともからなれと浄土のあるしはすて玉はて名号をとなへて善心にたにひるかへりぬればやかて往生うたかひなき也。故郷は浄土也。月は尋てはみたの誓願はさやうのものをもさらはず光をやとしてすくひとり玉ふ義也。

〈類題法文和歌集注解・一六九〇〉

観無量寿経および類題法文和歌集注解に記すところによれば、下品下生の者とは五逆罪と十種の悪行を犯し、長い間苦惱を受けた愚者であつても、仏は捨てられることはなく、命終に臨み念佛を唱えれば浄土に生まれることができる、とある。

さて、前掲の如く、善導の観無量寿佛経疏の区分に従うと、上品上生から下品下生までの九品の教えは、正宗分散善義に説かれている。「下品下生」即ち「下輩」について、善導は次の如く説きかかせている。

下輩。下行下根。人十惡五逆等。貪瞋。四重。偷倫。謗。不正法。未曾。慚愧。悔。前。慙。終時。苦相如。雲。集。地獄。猛火。罪人。前。忽。遇。生。善知識。勸。專。稱。佛。名。化。佛。菩薩。尋。聲。到。一念。傾。心。入。寶。蓮。三。華。障。重。開。多。劫。于。時。始。發。菩提。因。上。來。雖。有。三位。不同。總。解。下。輩。一。門。之。義。

〈観経散善義卷第四 p.70 上 1.6 ~ 1.11〉

右に掲出した散善義に拠ると――

下品の三生は修行も善根も甚だ劣った者の往生のことである。誰でも

が犯してはならない十悪を犯し、その他のあらゆる悪事を犯し、ついには親殺し等の五逆という罪までも犯す。常に貧り怒り、殺生・盗み・妄語・邪淫の四重罪を犯し、教団の物を盗み、仏法を誇る。しかし、恥じて前の過ちを悔いない。かくの如き者の臨終には、苦難が雲の如く集まり、地獄の猛火が罪人の前に迫ってくる

と説く。蓮生は、かくの如き者は、往生する「みちもなく」と詠じたのである。観無量寿経の経文「不善業五逆十悪（中略）受苦無窮」を詳細に説き示す善導の観無量寿佛経疏をふまえると、初句「みちもなく」には、佛道修行者の心情が感じられるのである。第二・三句「わすれはてたる故郷」には、観無量寿経の経文に「遇善知識（中略）違念佛。」とある如く、善知識に遇い、教法をきき極楽世界に生まれ得るにもかかわらず、五逆十悪にふける者の、なおも往生を願う想いを込めて詠じた詞であろう。下句「月はたつねて猶そすみける」に読まれた「月」は、經典に説くところでは唯一絶対の真理を喩えるといわれる。従って「月はすみける」とは、釈尊の教えは不変の真理として輝いていることだよ、との意となる。さて観無量寿経では「善友告言。（中略）具足十念稱南無阿彌陀佛。」とある如く、如何なる愚者であっても、名号を十度称えることよって往生できると説いている。善導の観無量寿佛経疏においては「遇往生善知識急観専稱彼佛名」とあり、事態の急迫を知り南無阿彌陀佛と称えることを勧めた、と説いている。そこで蓮生は、五逆十悪を犯し往生への道がないと考えられる愚者ではあっても、釈尊の不変の真理は照り輝いて、救いの手をさしのべることだよ、と詠じたのである。

「猶そ」の詞は、観無量寿佛経疏の「急勸」をふまえての表現であろうか。この詠は詞書「下品下生の心を」はずして鑑賞すると、今では通る道もなくなり、すっかり忘れてしまった故郷（旧都の意か）も、月は栄えていた昔と変わることなく訪れ、照り輝いていることだよ、と懐旧の情を淡々と詠じた和歌と受けとめられはしよう。しかしながら、釈教歌として詠まれた「みちもなく」の詠には、法然上人に帰依し、浄土教を深く信仰していた蓮生の、「我が身は愚者である。しかし、十念することよってどうか救い給え。」という佛道修行者の希いも感じられよう。善導の観無量寿佛経疏を精読した蓮生ならではの作といえるのではないか。

ところで、既に掲出した如く、後嵯峨院は蓮生と同様に数少ない「耆闍会」の和歌を詠じている。その後嵯峨院は、次の如き作をも詠じている。

下輩観をよませ給うける

後嵯峨院御製

おろかなる涙の露のいかでなほきえて蓮の玉となるらむ

〈新後撰和歌集・釈教・六六六〉

この詠は、愚かなる行いをしていた私が流した涙のその露が、どうして消えてさらに蓮の花に置く露となるのだろうか、という意であろう。観無量寿経の経文「得往生極樂世界。於蓮花中。満十二大劫」。蓮花方開當「花敷時」をふまえて、往生し難い此身であると知りつつも、善導が観無量寿佛経疏に「一念傾心入寶蓮」と説く教えをも強く受けとめ、蓮花に生まれることを願う想いの感じられる

作である。

後嵯峨天皇は承久二(一二二〇)年誕生、文永九(一二七二)年二月十七日崩御、五十三歳。土御門天皇第二皇子。文永五年に出家。続後撰・続古今兩勅撰集下命者であり、歌人としての力量も備え、続後撰集以下の勅撰集に二〇八首入集している。正元元(一二五九)年には一切経供養を営んでいるところから推して、善導の観無量寿佛経疏をも読誦していたと考えられる。後嵯峨院が観無量寿経・観無量寿佛経疏の各々に説くところをどのように受けとめ和歌に詠じているのか、今後、検証する予定である。

ともあれ、為家の岳父である蓮生と為家を和歌の師とした後嵯峨院の両名が図らずも、「耆闍会」「下輩観(下品下生)」の和歌を詠じていることは、注目すべきである。何よりも、蓮生の「み山にも」「みちもなく」の詠と後嵯峨院の「いひおきし」「おろかなる」の詠とは、観無量寿経の教えを詠じているとともに、その詠歌内容を吟味してみると、善導の観無量寿佛経疏に説くところとも深くかかわっていることを茲に確認せねばならない。

IV

歌人達は釈教歌を詠むにあたり、経文を和歌に翻案している場合が多い。ところが、「耆闍流通」の如く、經典中にその詞が見出せない歌題を詠じた釈教歌は、その歌題を初めて詠じた歌人の果した役割は、釈教歌史上さぶる重要となる。新和歌集に収録されている蓮生

の「み山にも」の作も、その点において注目すべき一首といえるのである。

以上、蓮生の「み山にも」「みちもなく」の考察から明らかな如く、釈教歌研究には、その和歌に詠まれた教えを解するためには、その教えの説かれている經典は勿論、その經典の注釈書類とのかかわりも追究していかねばならないのである。

注

(1) 群書類従本(第十輯所収)奥書に拠る。長崎健著「新和歌集の諸本について」(中央大学文学部『紀要』第34号所収)、小林一彦著「校本新和歌集」(芸文研究50所収)等参照。

(2) 『吾妻鏡』(國史大系32)に、次の如く記されている。

「十六日庚午。今日宇都宮三郎頼綱於下野國_ニ通俗_ト。同出家郎從六十餘人云々」

〈元久二年の条〉

(3) 『和漢三才図説』は二階堂の項で「當山西谷_ニ閑居_ス四年云々」と記している。法然上人の住む二階堂は勝尾寺の本堂大悲閣の東北に位置している。なお、このことについては、國枝利久著「靈場寺院に付せられた和歌について」(藤堂恭俊先生還曆記念論文集所収)を参照されたい。

(4) 浄土宗全書第十六卷所収(圓光大師行狀書圖翼贊) p.307。

(5) 国文東方佛教叢書・第五卷所収。

(6) 国史大辞典(吉川弘文館刊)等参照。

(7) 為家の父定家は、蓮生の求めに応じてその山莊に飾る色紙和歌、即ち「小倉山庄色紙和歌」(俗称「百人一首」)を編んでいる。その経緯は「明月記」に次の如く記されている。

「予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書

由、彼入道懇切、雖「極見苦事」^一、整染筆送^二之、古来人歌各一首、自「天智天皇」以来、及「家隆雅經」^三

〔嘉禎元年五月廿七日条〕

(8) 承安二(一一七二)年誕生し、八十八歳で没したとの説もある。「山城名勝志」等参照。

(9) 中川博夫著「新和歌集」成立時期小考」〔三田国文〕昭六一・一二所収、同氏著「新和歌集」成立時補考」〔稲田姫社十首歌〕「鶴岳社十首歌」をめぐって」〔徳島大学教養部紀要・人文・科学25所収〕等参照。

(10) 群書類従本の巻末には「新和歌集目録」が付されている。そこに掲出されている歌数と収録歌数との間には、若干の異同が認められるものがある。

(11) 「普聞嶺山」は妙法蓮華經の中にもみえる。

(12) 大正新脩大藏經 第十二卷所収。

(13) 大正新脩大藏經 第十二卷所収。

(14) 「浄土三部經」〔岩波文庫〕解説等参照。

(15) 本稿に掲出した観無量寿佛經疏の結構は、佛書解説辞典、村瀬秀雄著「和訳善導大師 觀經四帖疏」〔常念寺刊〕等参照。

(16) 香月乘光著「善導大師の觀經疏解説」〔浄土宗全書第二卷解説〕等参照。

(17) 浄土宗全書第二卷。

(18) 浄土宗全書第二卷 p.71下1.15~1.16。

(19) 注(16)参照。

(20) 新編国歌大観所収。本稿掲出の和歌は、おおむね新編国歌大観本の本文に拠った。

(21) 畑中盛雄著、寛政二年成立。古典文庫所収。

「いひおきし」の詠の第二句、類題法文和歌集注解では「いひ出し」(一七〇二歌)とある。

(22) 宮内庁書陵部蔵(五〇一・二八二)本(私家集全積叢書18・風間書房刊)の本文に拠った。この詠、宮内庁書書陵部蔵「勅撰并都鄙打聞

入長門前司時朝歌」(五〇一・二六七)には収録されていない。

(23) 「吾妻鏡」参照。

(24) 無量壽經には次の如く説いている。

「設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國 乃至十念 若不生者不取正覺唯除 五逆罪 謗正法」

湛澄は、その著・桑葉和歌抄において、四十八願の第十八願・念佛往生願の注釈文の中で、次の如く説いている。

「唯除五逆謗正法」

是は此願文の外にある語なり。名号を唱へばいかなる罪人も助給ふべし。但し五逆の罪を造りし人と、仏法を誹りし人とは除くとの義也。されどもその悪逆の人も後に深く懺怪して念仏すれば助らる、道もあり 觀經にその事見えたり」

桑葉和歌抄については、拙著「桑葉和歌抄 四十八願古歌注」―翻刻と研究」〔正林書院刊〕を参照されたい。

(25) 続拾遺集には次の作も収録されている。

九品歌よみ侍りける中に、下品下生を 禪空上人

夕日影さすかと思えて雲まよりまがはぬ花の色ぞちかづく

〔続拾遺集・釈教・一三八八〕

また、時朝は中輩生想を次の如く詠じている。

中輩観 これは聊の世春水舞の孝まで往生する也

手にくみてむすべばにこるやま水もすめばすみけり秋のよの月

〔時朝入京田舎打聞集・釈教・二八九〕

なお、蓮生の「みちもなく」の詠は、続千載和歌集(釈教・九八二)に、第三句「故郷に」として収録されている。

(26) 蓮生の次に掲げる和歌も、經典には見出せない詞を歌題として詠じた作である。

經教如鏡の心をよめる

のちの世をてらすかがみのかげを見よしらぬおきなはあふかひもなし

〔新勅撰和歌集・釈教・六一七〕

水想観

水すめばいつも水はむすびけり心やふゆのはじめなるらん

〈新撰撰和歌集・釈教・六六二〉

「のちの世を」「水すめば」両首ともに、観無量寿経に説くところを詠じた作である。水想観を詠じた「水すめば」は、下品下生を詠じた「みちもなく」と同様に、蓮生が観無量寿経に説くところを、或は善導の観無量寿佛経疏に説くところをもふまえつつ如何に受けとめていたか、慎重に検証せねばならない。

(せんこ りえこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程単位取得満期退学、佛教大学非常勤講師、種智院大学非常勤講師)

一九九九年十月十五日受理